

2025 年度政治経済学・経済史学会春季学術大会

春季総合研究会のご案内

戦後日本における「価値の承認」の展開 ——自営・雇用・ジェンダーの関係性を中心に

日時 2025 年 6 月 28 日（土）13：00～17：00

会場 東京大学（弥生キャンパス）農学部 1 号館 8 番教室

趣旨説明

沼 尻 晃 伸（立教大学）

報 告

1. 働く場からみた自営・雇用・ジェンダーの関係性——「役割」を中心に

禹 宗 杭（法政大学）

2. 暮らしの場における中間団体と自営・雇用・ジェンダー
——「社会財」としての川と水・水辺を対象として

沼 尻 晃 伸（立教大学）

3. 女性の就業にみる雇用・自営・ジェンダーの関係性——「自分で意味づける」

木 本 喜美子（一橋大学名誉教授）

コメント

1. ドイツ史の視点から

福 澤 直 樹（名古屋大学）

2. 自営業と地域の視点から

植 田 展 大（立命館大学）

3. 家族の視点から

嶋 崎 尚 子（早稲田大学）

司 会

安 藤 光 義（東京大学）、金 慧 昇（南山大学）

趣 旨

本企画は、「価値の承認」の視点から、戦後日本における人びとの承認要求とその実現のあり様に関するプロセスを、歴史と現状との関連に焦点を合わせ追究する。この作業を通じて、これまで十分に顧みられることのなかった戦後社会の一つの特徴を描き出すことを目的とする。ここで「価値の承認」とは、一言でいえば、社会のなかで価値ある一員として認めてもらうことである。その承認の内実は、働く場合（さらに自営する場合と雇用される場合）と働かない場合、地域社会のなかで活動する場合とそうでない場合に分けられる。さらには、男性である場（領域）や女性である場（領域）によっても、承認の内実は異なり得る。これらの点について、歴史と現状との関連や国際的な比較を交えつつ、戦後社会における「対等」や「連帯」の歴史的意味を考えることが、本企画のねらいとなる。

性差別の問題、非正規雇用の問題、あるいは「ひきこもり」の問題など、現在の日本社会には、承認に関わる多様な問題が山積している。そのような現状に関する問題関心を抱きつつ、歴史を振り返ってみると、人格承認の歴史に関しては、第一次世界大戦後における労働者や小作農民、女性、少数者の人びとによる人格承認要求が知られている。それでは、この時期の人格承認要求は、戦時期、さらには戦後改革を踏まえて、戦後社会にどのように継承され展開していったのであろうか。この点については、これまで、東條由紀彦らによる少数の研究〔東條 2016〕を除けば、本格的に検討されてこなかった。これに対して、東條のように抽象的枠組みから人格承認に接近するのではなく、〈一人前〉というキー

ワードを用いて人びとの側からアプローチし、その内実として「価値の承認」の形成と変貌を具体的に論じたのが、[禹・沼尻 2024]であった。ただし、同書は、自営を取り上げておらず、戦後の働く場と暮らしの場における「承認のための闘争」をダイナミックにとらえるために重要な自営とジェンダーとの関連、自営と雇用との関連について検討できていないという弱点を有していた。このような研究史に鑑み、本企画では、自営業者を射程に入れ、戦後を生き抜いた人びとが自営・雇用・ジェンダーの関係のなかで「価値の承認」をどのように編み出したのか、その動態に迫る。

「価値の承認」は、アクセル・ホネットが提唱したモデルを念頭において用いる。ホネットは、社会的な承認関係として、原初的關係（愛・友情）、法的關係（権利）、価値共同体（連帯）の三つの承認形式を提唱したが、本企画が目指したいのは、このなかの価値共同体の承認形式である。身分制社会においては個々人の身分に応じた「名誉」が意味を持つが、近代以後、人びとの身分的な意識が弱まり個体化が進む中で、新たな社会の目標（ここが価値と結びつく）に貢献することを通じて自らが承認されたと感じるようになる（以上、[ホネット 2014]）。この承認形式を「価値の承認」と呼ぶこととし、本企画の中心概念に据える。

ホネットの議論と関連づけて本企画の特徴を述べれば、戦後日本社会を、「権利の承認」との関係に十分留意しつつも、主として「価値の承認」から把握しようとする点にある。これまで、戦後社会の変化を考察する場合の評価軸は、多くの場合「権利の承認」であった。戦後改革によってもたらされた基本的人権のもとで戦後民主主義が展開する、そこでは、自由権的基本権だけでなく社会権的基本権も要求され、さらに少数者の権利要求も進むというように、「権利の承認」の視点から戦後社会を捉えることが一般的であった。しかし、本企画では、単に「権利」を通して人びとが承認を求めたのではなく、むしろ「権利」に立脚しながら「価値の承認」を求めた点に注目する。このように考えれば、戦後において特定の中間団体のなかで人びとが共有した社会の目標とそこでの価値とは具体的に何であり、その価値に照らして人びとはどのような「承認をめぐる闘争」を展開し、社会のなかで価値ある一員として認められたのかを追究することが必要となる。そこでの承認は、もちろんゼロからのスタートではなく、もともと人びとが有している関係性の延長線上に位置づく。そこで本企画では、自営・雇用・ジェンダーという3つの関係性を対象として、そのことを、働く場・暮らしの場・女性の就業の3つの視点から検討することを通じて、「価値の承認」を追究する。そのうえで、外国経済史研究からの視点、自営業と地域からの視点、家族の視点からのコメントを得ることで、多数の参加者の関心に見合う幅広い議論を展開していきたい。

〈参考文献〉

禹宗杭・沼尻晃伸『〈一人前〉と戦後社会』岩波書店、2024

東條由紀彦編著『「労働力」の成立と現代市民社会』ミネルヴァ書房、2016

ホネット、アクセル〔山本啓・直江清隆訳〕『承認をめぐる闘争〔増補版〕』法政大学出版局、2014

協賛 社会政策学会